

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第41回 「私もプロレスの味方です」 - レッスル夢ファクトリー

詳しいデータを調査したわけではないので、あるいは間違っているかもしれないが、今、日本で一番、観客動員数の多いプロスポーツは、恐らく「野球」だろう。昨年のタイガースのリーグ優勝、今年の巨人軍の「史上最強打線」と、何かと話題が多い。

そんなプロスポーツ業界の中で、中々検討しているのが「格闘技」界である。格闘技といっても、老舗のボクシングではなく、K-1、プロレス、に代表されるいわゆる「総合格闘技」である。ここ1～2年の大晦日は、「格闘技の日」。テレビ数局で放映させた視聴率を合算すれば、NHKの「紅白歌合戦」を上回る勢いである。

私事で恐縮だが、今から7～8年前、ひょんな関係から、プロレス団体の運営に関わる機会を持った。「レッスル夢ファクトリー」と言ったその団体は、我が故郷・熊谷に拠点を置き、マイナーながら、みんな一生懸命やっていた。先日、実に久しぶりに、旧レスルに所属していたレスラーと盃<sup>さかずき</sup>を<sup>か</sup>交わす機会を持った。

彼らの団体は、花形・スター選手はほとんど居らず、「プロレスだけが生き甲斐」の無名の若者達が、毎日「四角いジャングル」で汗を流していた。とかくプロレスと言うだけで、軽蔑し、いかがわしき眼<sup>まなこ</sup>で見ている人が多い。「あんなの、スポーツじゃないよ」「どうせ八百長だろう」...

でも彼らの毎日やっている練習を、一度でも見たことのある人は、「そんなことどうでもいい」、マジに、そんな気持ちになるに違いない。2000回、3000回と繰り返し続ける「スクワット」と言われる膝<sup>ひざ</sup>の屈伸運動、その足元には、汗の水溜りが出来ている。誤ってコーナーポストに頭をぶつけ、それでも怯<sup>ひる</sup>まず向かっていく彼の額<sup>ひたい</sup>は、真っ赤な鮮血<sup>したた</sup>が滴れ落ちていた。鍛え抜かれた強靱な肉体を、何ら躊躇することなくぶつけ合い、いじめ合い、死力を尽くし戦い抜く、プロレスのライヴの凄<sup>すさま</sup>まじさは、鳥肌が立つほどの感動を呼び起こす。オリンピックではあるまいに、従って結果は結果、要はどれだけ自分が燃え尽きたか、そして本当にお客様が楽しんでくれたか、それが全ての結果である。

そうだとしたら、プロレスは「最高のエンターテイメント」と言っていいかもかもしれない。下劣極まりないバラエティ、ただ喚<sup>わめき</sup>き散<sup>う</sup>らす騒<sup>うるさ</sup>いだけのロックミュージシャン、まるで学芸会の如くのトレンドドラマ、...「こんな稚拙<sup>ちせつ</sup>なエンターテイメントもどきよりは、ずっと、ずっとマシ」と思い込んでる小生は、村松友視流『私もプロレスの味方です』。

熱く、一途<sup>いちず</sup>に、思いっきりのパトス(pathos)を燃やす。こんな経験をもち辛<sup>づら</sup>くなっている現代、若者が格闘技に夢中になる現象は、何となく分かるような気もする。あの時のレスルの若者が、今でもがんばっていると聞いて、頗<sup>すこぶ</sup>る嬉しい限りである。